

むかし しゃしん いま しゃしん
昔の写真、今の写真

みぎ しゃしん うつ が か
右の写真に写っているのは画家のセザンヌさんです
ゆうじん が か と
友人で画家のベルナールさんに撮ってもらいました

Q1. セザンヌさんは今何をしているところだろう？

Q2. セザンヌさんは今何を考えているだろう？

Q3. あなたがお友達(家族)に写真を撮ってもらうなら、どんなポーズをしますか？

じっさい と
実際に撮ってみよう！

Q4. 撮った写真と右上の写真を見比べると、どんなところが同じかな？どんなところが違うかな？



エミール・ベルナール 《ポール・セザンヌ》
1904 もしくは 1905年

肖像画と肖像

人の姿を絵で残しておきたいという想いは、今も昔も、東洋でも西洋でも、人々の中にありました。歴史の教科書を開けば、古代ローマ皇帝から日本の戦国武将、現代の政治家など、いたるところに人の顔が載っています。これらの肖像画のおかげで、彼らが生きていた時代から長い年月を隔てた今現在でもその姿を知ることが出来るのです。

しかし、画家が肖像画を描く際、その人の姿を必ずしも見た通りに表現した訳ではありませんでした。時には、作品制作の依頼をしてきた王様や貴族などの注文に従い、顔や身体を实际よりも優美に描いたり、豪華な衣服を着せたりすることもありました。有名な事例を挙げると、豊臣秀吉（1537-1598）は肖像画を描かせる際、「威厳のある顔」「顔は小さく、身体は大きく」など注文をつけていたという逸話が残されています。つまり、肖像画には「自分はこう見られたい」という願いが反映されているのです。

ただし、肖像画は大変高価で、一部のお金持ち以外には手の届かないものでした。庶民は自分を含め家族や友人、恋人など大切な人の姿を形に残したいと思っても、記憶に留めておくことしかできなかったのです。そのような状況を一変させたのが写真です。19世紀前半に新しく発明された写真は、人が目で見たままの像が紙に写し出される、まさに魔法のような技術でした。比較的安価であった写真のおかげで、多くの人が肖像を残しておくことができるようになったのです。

現代ならこんな感じだったかも？

エミール・ベルナール撮影《ポール・セザンヌ》1904もしくは1905年

この写真が撮られたのはフランス南部に位置するエクス=アン=プロヴァンスのローブ通りという場所です。晩年のセザンヌは自分の生まれ故郷であるエクス=アン=プロヴァンスにアトリエを構え、幼い頃から慣れ親しんだサント=ヴィクトワール山をくり返し描きました。《サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》(1904-06年頃、アーティゾン美術館蔵)はそのうちの1点です。撮影者のベルナールは1904年と1905年に先輩画家として敬愛するセザンヌのアトリエを訪れ、わずかですが同じ時を過ごしました。ベルナールが写したセザンヌは、コートや羽織りうつつむぎ加減で広野に立ち、こちらを見つめています。彼の眼差しには若き友人ベルナールへの信頼が表れているようにも見えます。

このような肖像写真も肖像画の伝統の延長線上にあり、セザンヌは自分がどんな風に見られるのか意識しながらポーズを取っていたのでしょう。一言でいえば「カッコつけていた」のです。あなたは他人に写真を撮ってもらう時、どのようなことを考えているでしょうか。現代に生きる私たちとセザンヌ、さらに歴史上の偉人まで、考えることは案外同じなのかもしれません。



Q5. 写真の登場に対し、肖像画家をはじめ画家たちはどのような反応を見せたと考えられますか

 ポジティブ：

 ネガティブ：



本紙に登場するセザンヌやベルナールの作品画像を見たい方はこちらから！